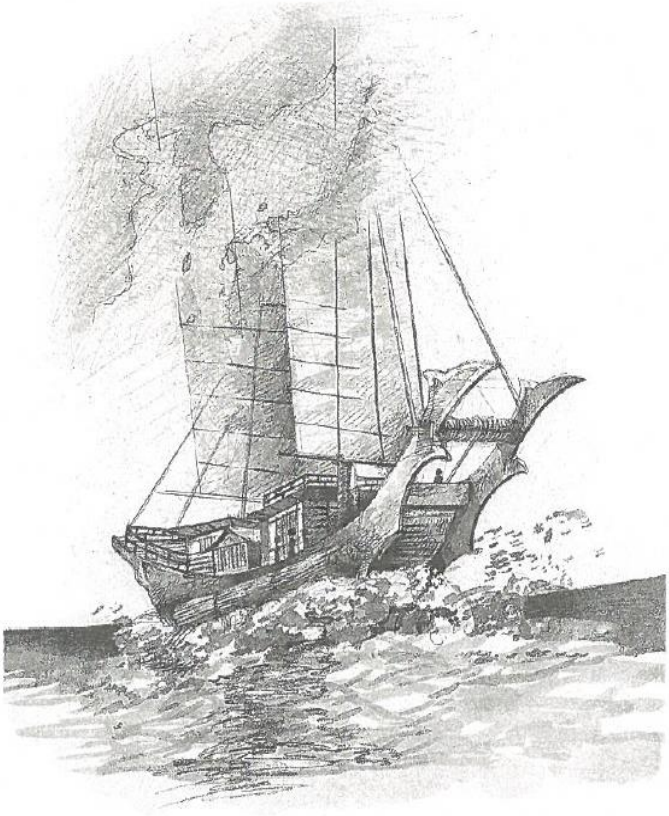
荒波を乗り越えて　ー　吉備真備（きびのまきび）　ー

飛鳥時代の終わり、六九五年の春、下道郡八田郷（しもつみちぐんやたごう）（現在の倉敷市真備町箭田（まびやた））に大きな産声（うぶごえ）が響いた。圀松（くにまつ）（のちの真備）の誕生である。すくすくと育った圀松は、父が奈良の都で宮廷の警備をする仕事をしていたため、両親とともに都で生活するようになった。

圀松はよく勉学に励み、国に仕える役人を養成する「大学寮」に入学した。この大学寮は、全国に一つしかなく、位の高い役人の子どもだけが入ることができた。父の位が低かった圀松は、特別に試験を受けて合格した。圀松は、誰よりも一生懸命学問に励んだ。そして首席で卒業し、名前を真備と改めることを許された。

七一七年、真備は、第八次遣唐船留学生に選ばれ、僧の玄昉（げんぼう）や貴族の阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）らと共に、四隻（せき）の船に乗り、唐に向けて出発した。真備は、まだ二十三歳の若者だった。

遣唐船の旅は、大変危険なものであった。当時は、季節風の知識に乏（とぼ）しく、遣唐船はよく難破（なんぱ）した。そこで遣唐大使と副使は必ず別々の船に乗り、無事に着いた方が国の代表を務めた。また無事に着いても、次の遣唐船の迎えは



圀松…荒木栄悦著「吉備真備物語」の中で使用された架空の幼名。

首席…一番いい成績。

いつ来るかわからず、三十年後に戻った例もあった。

家族の心配も相当なものだった。もちろん、旅に対する自分自身の不安も大きかった。しかし、真備は大学寮の講義だけでは物足りなさを感じており、唐で本物の学問を学びたいという気持ちが日増しに強くなって、留学生になることを決意した。

唐の都、長安は世界で最先端の政治制度や文化があり、遣唐使は、その進んだ仕組みを日本に取り入れ、国家の確立をめざすために派遣されたものであった。真備たちは新しい学問や政治制度など多くのことを日本に持ち帰ろうと必死で学んだ。

十七年の歳月が流れ、待ちに待った遣唐船が日本から着いたという知らせが届いた。真備たちは長安を出発し、陸路を経て、船に乗り込みついに種子島に流れ着いた。そして島伝いに北上し、半年以上かけて、七三五年の春、ようやく奈良の都に帰り着くことができた。

真備は、唐から持って帰ってきた知識や経験を活かし、新しい国を作ろうと動き始めた。病気で困っている民衆のために医療を施して薬を与え、米のとれない民衆のために、新しい作物の作り方を教えた。さらに儒教や仏教を盛んにして、唐のような国を作ることを天皇に提案した。こうして国のために尽力した真備は天皇の信頼を得て、姓を与えられ、「吉備朝臣真備」と名乗ることを許された。

しかし、当時政権を握っていた藤原仲麻呂にうとまれ、真備は筑前守、続いて肥前守として都から遠く離れた九州へと追いやられてしまった。真備は、九州で生活するようになっても、常に都の様子や国づくりのことが気にかかっていた。

長安…唐の中心的な都市で、人口一〇〇万人を超え、文化の中心として栄えていた。

種子島…鹿児島県の南方にある島。

筑前…現在の福岡県北西部。

肥前…現在の佐賀県あたり。

そんな折に、都から一通の手紙が届いた。今度は遣唐副使として再び唐へ向かうようにという内容であった。

真備にとっては、嬉しい知らせだった。今の日本は国の政治が乱れ、豪族たちによる激しい権力争いが起こっている。貧しい生活をしている人々も、その争いに巻き込まれて命を失っているのだ。さらには日照りや干ばつが続いて飢饉が起こり、人々は税が払えず苦しんでいる。国の政治の仕組みを整えて、人々が安心して暮らせる国にしていくためには、もう一度唐に行って多くのことを学ばなければならない。

そう考えた真備ではあったが、同時に不安も重くのしかかってきた。唐までの航海は決して安全ではない。前回はたまたま無事に戻ってこられたが、命を落とした仲間たちも大勢いる。再度日本に戻ってこられるという保証はない。年齢も五十五歳を過ぎている。いくら多くのことを学んでも、それを持ち帰ることができなければ、新しい国づくりを進めることはできないのだ。

どうすべきか考え抜いた末、それでも再び唐に行くことを決意した真備は、七五一年、第十次遣唐副使として遣唐船に乗り日本を出発した。

真備は、遣唐副使としての任務を果たすとともに、以前共に唐に渡った阿倍仲麻呂と再会し、政治や仏教、文化などについて、さらに深く学んだ。その後、一緒に帰ることとなった仲麻呂らの乗った船は嵐で遭難し、日本に戻ることはできなかったが、真備の船はまず沖縄に着き、さらに紀伊半島に流れ着いた後、無事都に帰ることができた。

このとき真備は唐の高僧であった鑑真を日本に招き、日本の仏教界の立て直しに努めた。また、造東大寺長官に就任し、奈良の都に東大寺を建立する責任者としての役目を果たした。また、藤原仲麻呂の反乱をいち早く鎮圧するなど治安の乱れも治めた。それらの功績から真備は、中納言、大納言となり七十二歳のとき、右大臣（天皇、法王、左

造東大寺長官…東大寺

鎮圧…反乱を武力によってしずめること。

大臣（だいじん）に次ぐ地位）にまで昇進した。

真備は、地方の位の低い役人の子どもに生まれたが、よく学び、政治上の重要人物として活躍した。奈良時代の儀式の様式を確立し、国を治める律令制度の仕組みを改革したといわれている。その後も真備は自分の一族を重用（ちょうよう）することもなく、自分の使命を全（まっと）うすることに全力を注ぐ清潔な学者であった。

右大臣を辞めた真備は、故郷に帰って余生を過ごし、七七五年に八十一歳で没（ぼっ）している。

重用…その人を重んじて重要な役に就かせること。

吉備真備略年譜

七一七　第八次遣唐留学生として入唐。
七三五　帰国。その後、大学助となり、知識人として活躍。
七四六　姓を与えられ、「吉備朝臣真備」と名乗る。
七五〇　筑前守、次いで肥前守として左遷される。
七五一　第十次遣唐副使として、二度目の入唐。
七五三　帰国。その後、太宰大弐として、九州に左遷される。
七六四　中央に帰る。造東大寺長官となる。その後、中納言、大納言、右大臣となる。
七七一　右大臣を辞める。
七七五　八一歳で没する。

岡山県道徳教育郷土資料集（中学校）　指導案　「荒波を乗り越えて―吉備真備―」

1　主題名　　困難や失敗を乗り越えて〔A 希望と勇気、克己と強い意志〕

2　ねらい

物事を粘り強くやり遂げるためにはどんな気持ちが必要なのか考える中で、困難や失敗に直面しながらも、生涯をかけての理想や目標に向けて努力し続けようとする強い意志が必要なことに気付き、自分の目標に向かって絶えず挑み続けようとする態度を養う。

3　主題設定の理由

(1) 内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 希望と勇気、克己と強い意志「より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。」である。

人生において、目標の実現には「希望」や「勇気」という積極的な気力が必要である。困難や失敗を経験することは多々あるが、それを乗り越えて目標に向かって努力し続けるには、希望と勇気を失わない前向きな姿勢や、失敗にとらわれない柔軟でしなやかな思考、自分自身の弱さに打ち克って着実にやり遂げようとする強い意志などが大切であると考える。

第２学年では、困難に直面してもくじけず、目標達成に向けて勇気と希望をもちながら、常に挑み続けようとする態度を養っていきたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は、自分の好むことや価値を認めたものについては意欲的に取り組む態度が育ってきている。しかし、自分に自信のない生徒も多く、困難や失敗に直面すると物事を簡単にあきらめてしまったり、挫折や失敗を見せないようにしたりそれらを回避したりしようとして、安易な選択をしてしまったりする生徒も見られる。

そこで、生徒の努力を評価しながら、目標を達成するためには、どんなことがあっても最後まで強い心をもち続けることが高い壁を越える力になるということに気づかせ、困難や失敗にもくじけず希望と勇気をもって挑み続けようとする前向きな姿勢を培っていきたい。

(3) 教材について

本教材は、平安時代に活躍した「吉備真備」の生き方を取り上げたものである。

吉備真備は身分の低い家庭に生まれ育ちながら、まっすぐに学業にいそしみ、その能力とやる気を買われ、遣唐使として唐へ渡る。先進の文化や政治経済に触れ、日本に持ち帰り、新たな日本を作っていく。その後、有力者のねたみから左遷されて不遇な生活を送るが、自分の目標や理想を達成するため再び唐へ渡り、命をかけて国づくりに尽力した。

その生き方を通して、困難や失敗に直面しながらも自分の理想や目標に向けて強い意志をもって乗り越えていくことの大切さについて考えさせたい。

4　板書例

荒波を乗り越えて―吉備真備―

倉敷市真備町

遣唐使として二度に渡り唐へ

○ 初めて唐に渡ろうと決心したとき
- 本物の学問を学ぶよいチャンスだ。
- もっと勉強していろいろなことを知りたい。
- 留学生として立派に責任を果たしたい。

○ 再び唐へ渡るようにという手紙が届いたとき
- 危険な航海なので帰って来られるか不安だ。
- 歳を取っているので体が心配だ。
- 学んだことを生かせないかもしれない。
- 多くの人が苦しんでいる。
- 人々が安心して暮らせる国にしなければ
- 国を変えていくのが自分の使命だ。

○ 粘り強くやり続けるために今の自分に取り入れたいこと
- くじけないで前に進もうとする気持ち
- 目標を達成させようという強い意志
- 人のために役立ちたいという気持ち

もっと粘り強くやりとげる力があればいいなと思ったこと

めあて

粘り強く物事をやりとげるには、どんな気持ちが必要なのか考えよう。

5　他の教育活動との関連

社会科〔歴史的分野〕（遣唐使）

６　学習指導過程　　○は基本発問　◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1　目標に向かって取り組む姿勢について話し合い、本時のめあてをつかむ。	○　自分にももっと粘り強くやり遂げる力があればよいなと思ったことがあるか。 ・英語が上手に話せるようになりたくて英会話教室に通ったが、途中でやめてしまった。 ・もっと野球が強くなりたくて自主練習を始めたが長くは続かなかった。	・具体的な経験を出し合う中で、やり遂げたいという気持ちはあるがなかなか難しいことから、学習課題を意識できるようにする。
物事を粘り強くやり遂げるためには、どんな気持ちが必要なのか考えよう。		
2　教材「荒波を乗り越えて」を読んで話し合う。		・「真備町」の出身で、岡山県にかかわりの深い人物であることを知らせる。
(1) 初めて唐に渡ろうと決心したときの真備の気持ち	○　真備は、どんな思いで唐への一度目の渡航を決心したのだろう。 ・本物の学問を学ぶよいチャンスだ。 ・もっと勉強していろいろなことを知りたい。 ・留学生として立派に責任を果たしたい。	・不安を感じながらも、もっと学問を究めたいという前向きな気持ちを押さえるようにする。
(2) 再び唐に渡るようにという手紙が届いたときの真備の気持ち	◎　遣唐副使として再び唐に行くようにという手紙が届いたとき、真備はどんなことを思ったか。 ・唐でもう一度学びたいが、危険な航海なので再び帰って来られるかどうか不安だ。 ・歳をとっているので体は大丈夫だろうか。 ・帰ってこられなければ、せっかく学んだことを生かすことができない。 ・この国には苦しい思いをしている人たちがたくさんいる。 ・政治の仕組みを整え、人々が安心して暮らせる国づくりをしなければならない。 ・国を変えていくのが自分の使命だ。	・グループワークを取り入れ、真備の心の中をしっかりと考えさせることで、多様な気持ちを出し合えるようにする。 ・出し合った気持ちをもとに、心の葛藤がある中で再び唐に行こうと決意したのはなぜか考えることで、人々が安心して暮らせる国へと変えていくことが自分の使命だと考えた意志の強さに気づくことができるようにする。
3　自分を振り返り、粘り強くやり遂げるために必要な気持ちについて考える。	○　粘り強くやり遂げるために、今の自分にどんな気持ちを取り入れたいと考えているか。 ・くじけないで前に進もうとする気持ち ・目標を達成させようという強い意志 ・人のために役にたちたいという気持ち。	・教材を通して学んだどんな気持ちを取り入れたいか、これまでの自分を振り返りながら考えることで、実生活に生かすことができるようにする。
4　まとめをする。	○　ワークシートに書いた気持ちを紹介しよう。	
評価の視点	・グループ活動等を通して多様な考えを出し合い、生涯をかけての理想や目標に向けて努力し続けようとする強い意志が必要なことに気付くことができたか。 ・これまでの自分を振り返り、自分の目標に向かって絶えず挑み続けようとする意欲を高めることができたか。	

7　参考資料

(1) 資料に関連して

・岡山県の矢掛町から倉敷市真備町にかけての小田川流域一帯は吉備真備ゆかりの地であり、真備の遺徳をしのんでそれぞれの記念公園を造っている。また、倉敷市真備町にある「まきび記念館」には、吉備真備の関連資料が展示してあり、真備の業績に触れることができる。

・吉備真備は歴史上有名な人物ではあるが、教科書等に詳しく触れられていないこともあり、知らない生徒も多い。また、揺れ動く古代律令制社会の中で政治に関与していたこと、伝説が多いことなどから、その人物像には、様々な見方がある。ここでは、「吉備真備」を、困難や逆境の中でも勇気と希望をもって前向きに生きた人物としてとらえ、現在に共通するものを学びとらせたい。

(2) 現在のわれわれが「吉備真備」から学ぶこと

吉備真備は、単なるロマンチストではなかった。現実に立脚して道理を解く人であり、道理にかなった行動をする人であった。事に当たってスタンドプレーはなく、華やかさもなかった。情熱を内に秘めた極めて勤厳実直で清廉な政治家であるとともに、儒教に裏打ちされた地味な教育者であり文化人であった。そのような真備の人柄を考えるキーワードとして、次の５つの言葉を設定して見たのだが、いかがであろうか。

その一つは、「進取」。困難で危険な航海が待ち受ける遣唐留学に進んで挑戦し、先進地の唐の文化を日本にもたらすとともに、遣唐副使としても積極的に参加し、日中交流に努めた。

その二つは、「勤勉」。優れた頭脳に加え、その勤勉さによる勉学の成果が遣唐留学生の選任に結びついたし、唐に渡ってからは、唐の人々も認めるような勤勉さで、その勉学は極めて多方面に及んだ。

その三つは、「忍耐」。藤原仲麻呂に嫌われて藤原広嗣の怨霊の残る筑前守、ついで肥前守に左遷されながらも耐え忍び、太宰府に左遷された時も自暴自棄にならず、日本の防衛のために数々の業績をあげた。

その四つは、「清廉」。醜い政争にくみすることなく、ひたすら日本の国を思い、官人の誤りや綱紀を正し、民の声を朝廷に反映させるなど終始清廉な政治を貫いた。

その五つは、「謙虚」。豊かな学識を持ちながら決して驕(おご)ることなく、また、右大臣という顕官に昇りながら常に謙虚に対処し、右大臣を辞任する時も謙虚な姿勢が見られてさわやかな印象を与えた。

真備は進取の人、勤勉の人、忍耐の人、清廉の人、謙虚の人であった。人を裏切ることのない人であった。「人間への信頼」を根底においた誠実そのものの人柄であった。現在のわれわれがそんな吉備真備から学ぶことは極めて多いのではないだろうか。

（ 高見茂著『吉備真備－天平の光と影－』より）

(3) 参考文献等

・『吉備真備－天平の光と影－』高見茂（山陽新聞社）

・『吉備真備物語』荒木栄悦（善本社）

・『きびのまきび』（吉備真備絵本編集委員会・真備町教育委員会）

・まきび記念館（吉備郡真備町）

・マービーふれあいセンター（吉備郡真備町）

・矢掛町産業課